

太平洋戦史研究部会報告(4)

太平洋戦史研究部会第4回セッション

トラック空襲その二

講師 加藤 邁 トラック諸島海軍戦友会連合会常任理事

講師 杉本 作兵衛 元第四海軍軍需部嘱託

とき 昭和六十二年二月十一日

ところ 星陵会館会議室

司会(中島洋) きょうはお休みのところをお集まりいただきまして、ありがとうございます。

前回、竹下高見先生のお話で『トラック空襲』についてお伺いいたしましたが、今回は是非、その日にトラックの現地におられた方のお話を伺いたいということ、その空襲のアメリカの飛行機を採知された冬島の電探の、当時の所長であった加藤邁さん、それか

ら当時夏島の軍需部に嘱託としておられた杉本作兵衛さん、そのお二人をお招きしまして、当日のお話を伺うという事にいたしました。まず加藤さんからお話をさせていただきますでしょうか。

連合艦隊基地としてのトラック

加藤 中島さんからお電話をいた

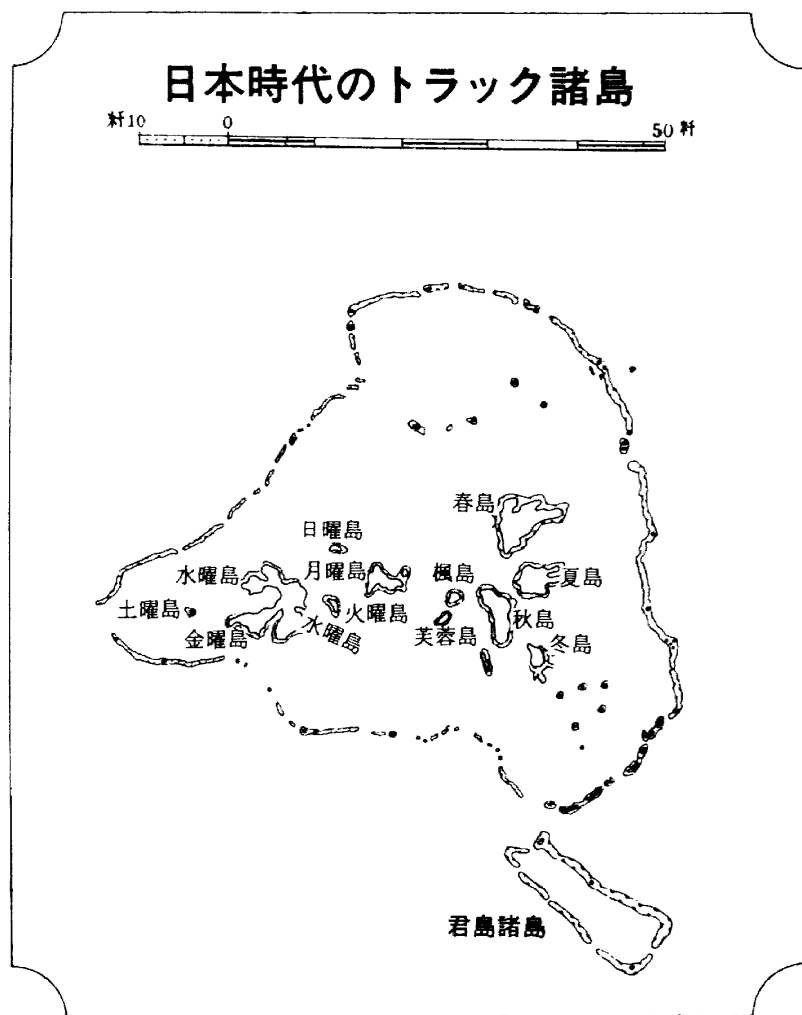
きました、私はその任に非ずということとで再三ご辞退申し上げたんですが、ちょうど私がトラックの大空襲の当時、トラック島におったということ、この目で見た当時のことを、皆様にお話し上げたいと思っております。

光陰は矢の如しといえますけれども、全くそのとおりで、ついこの間のことのように思ったのが、もうすでに四十年前、細かいことはもうだいぶ忘却

の彼方に没しましたけれども、まあ、あの当時の情景は、これはもう私が死ぬまで一生、この晩の裏に強く焼付けられております。

大体、トラックは、大きく分けまして、あの空襲以前のトラック、これはまさに連合艦隊の基地であり、ある意味では本当のパラダイスの要素を十分に持った美しい島々だったわけです。それが大空襲を契機として、これ

日本時代のトラック諸島



右の図は、『南洋群島要覧 昭和十二年版』(南洋庁)の付図に基づいて作成しました。
 なお、トラック島夏島会のご厚意により、稿末に同会作成の『夏島』および『夏島中心部』の図を掲載させていただきます。

〈太平洋学会事務局〉

はまさに飢えの、飢餓の島と化したわけです。

そうして終戦まで推移しまして、終戦になりました、今度はアメリカ軍がトラックに進駐してまいりました。これは硫黄島を攻略した連中も相当おりましたんで、大変生きのいいアメリカのネイビーとマリンがやってきました。これとの折衝が一年間と、大体私の体験したトラック島での生活は、そういう三つの時代に分類されるんじゃないかと思えます。

私は、十八年の十二月に「秋津洲」に乗りまして、トラック島に着任したわけですが、その当時のトラック島の状況をちょっとお話ししたいと思います。ここにおける杉本作兵衛さんは、それよりずっと前からおられますし、よきトラック島の思い出をたくさんお持ちなんです。あとでいずれいろいろお話しも出ると思いますが、私はほんとに数カ月、そのよきトラック島をかいま見たわけでございます。

十八年の十二月に行きました時には、夏島と秋島の北部の海域、これが艦隊錨地でございます。そこには武蔵、長門さらに巡洋艦が数隻、駆逐艦、潜水艦と、まさに連合艦隊の鱧艦は、その艦隊錨地を埋め尽くしておりました。

まことに美しい風景でございました。夏島と竹島の間、それから竹島の南方方面、東、それから秋島と竹島の間、

これが商船錨地、ここには愛国丸をはじめ多くの商船が荷揚げ作業のために停泊しておったわけです。だから、北半分が艦隊錨地、南半分が商船錨地と大体大別してそういう形になっておったわけです。

そのころは婦人もいっぱいおりましたし、トラックを基点にしてラバウル方面、あるいはマーシャル方面へ行く人々、そういうことで艦隊棧橋は非常ににぎわっておりましたし、湾内は走り回るカッターや内火艇で大変活気に満ちておりました。

竹島も零戦がブンブン飛上りまして、まさに連合艦隊の基地として相応しい大いなる活況をもった基地でございました。

私は海軍の通信学校、久里浜の通信学校を終えまして、少尉に任官したあと、十数名のものがさらに電探を、新しい兵器の電探を研鑽せよということをお任せつかりまして、私もその一員になりました。さらに三カ月電探の勉強をして、それからあとにトラック島へまいったわけです。

私が着任した時は、すでに冬島に二機、春島の中部の中腹に一機、それから金曜島に一機と合計四機の電探が配備されておったわけです。

地理的条件から申し上げますと、冬島は山の頂上に二つあったわけです。これはオールラウンド、全然遮るもの



春島の高台から見た夏島（中央）と秋島（右）

は何もありません。そういう意味でも捕捉角度の広い電探でございました。春島は尾根の中腹にありまして、西側は若干スロープがありますので、そっちのほう若干弱いと思いますが、それ以外は広角の捕捉角度を持っておりました。金曜島は、これは西方面が専用でございます、東側には山頂を頂いておりますので、もう西方向一本ということと配置されておりました。

しばらく私は、第四一警備隊付けでまいったわけです。行った所は夏島です。ここが第四艦隊司令部がある、当時のトラック島の中核の島でございます。第四艦隊司令部のほかに四一警、その隣りには八五潜水艦基地隊、工作部、軍需部、さらに北方には施設部、運輸部、港務部と、そういう庁舎がずーっと海岸沿いに並んでおりました。

そのころは、もうすでにラバウルが相当苦しい状況にあったわけです。山本長官はすでに亡くなられて、私が行った当時は古賀長官が旗艦武蔵に座乗されておった当時でございます。そういう意味で山本長官が亡くなられた悲しみは、まだ大きな余韻として残っておったような気がいたします。

連合艦隊のトラック避退

そして正月を迎え、いよいよ昭和十

九年を迎えたわけなんです、ちょうど二月の四日と記憶しておりますが、アメリカ軍のコンソリデーデッドだと思えますが、一機、西方のほうから侵入いたしました。これは高度が七千ぐらいたったと記憶しておりますが、これは電探がもう三百キロ捕捉しましてずーっと追従しておりました。早速航空隊に連絡して、航空隊がこれを邀撃すべく舞い上がったわけなんです、結果的にはこの一機を取り逃がしてしまったということなんです。

その際、その偵察機がトラック島の航空写真を撮って、そこに連合艦隊武蔵以下の機軸はじめ、各航空基地の実態を、そのカメラに収めて行ったと判断されるわけです。

ちょうどそのころ、マーシャルは、非常に危険な状態にありまして、ギルバートのタラワ、マキンに続いて、その後はクエゼリン（クワゼリン）が危ない、そこにアメリカの機動部隊が集中攻撃をかけるだろうというような状況の時でございます。

それから確か、その偵察機が入ってきて、これは敵機動部隊がトラック島に來襲する算大なりということで、古賀長官がそういう判断をされまして、二月の十日だと記憶しておりますが、武蔵以下の連合艦隊はトラック島から散開したわけです。

当時、私は冬島電探の所長として、

冬島のとっぺんから、その武威以下の
 艦隊が南水道から出て行くのを、大変
 寂しい思いというか、まことに複雑な
 気持ちで見送っていたことを、いまでも
 覚えております。

一体、これはどういう作戦になるの
 か、まさか武威がそれから横須賀に帰
 ったということは夢にも知りませんで
 したけれども、それは帰ってからわか
 ったことなんです、この環礁内では、
 いたるところリーフでございまして、
 ここを巨艦が走るには、非常な運航の
 技術を要するわけなんです。ここでは
 とても身動きができません。

そういう意味で、艦隊が広々とした
 大海に出ていったことは、縦横無尽に
 暴れられることだろうということ、
 私も一安堵したわけですが、一面、な
 ぜ多くの商船群をそのまま残しておく
 のか、本当に任官したばかりの少尉で
 したけれども、武威が南水道から出て
 行く姿をみながら、まず頭に残った一
 つの疑問は、この多くの商船群を、な
 ぜ一緒に連れて行かないのか。ここに
 このまま残しておいてどうするつもり
 だろうかという、非常に率直な疑問が
 湧きました。

戦後、米国のLSTを見たんですけ
 れども、ああいうきわめて短時間で荷
 揚げ、荷下ろしできるLSTみたいな
 船はなくて、当時の日本の荷揚げはき
 わめて緩慢、旧態依然たる作業を行っ

ておりました。ああいうLSTのよう
 な船があれば、敵が近付いておるのに、
 長々と荷揚げ作業をやる必要はなかつ
 たと思います。

弾薬、糧食その他のいろいろ荷揚げ
 の予定もあつたんでしようけれども、
 あの際、商船群も一緒に散開させるべ
 きではなかったかと、これは結果論的
 に思いますが、私はいまでもそれを残
 念に思っております。

第一警戒配備発令

そうこうしているうちに、大空襲は
 二月の十七、八日ですけれども、その
 前々日あたりと記憶しておりますが、
 第一警戒配備が発令されたわけなんで
 す。第一警戒配備というのは、これは
 もう戦闘用意ということ、私たちがも
 ついに敵の機動部隊がくるか、ここで
 俺も死ぬかということを決め、各
 航空隊の飛行機も全部爆弾から魚雷を
 抱いて、よき敵ござんなれというわけ
 で、待機したわけなんです。ここで、
 とところが、空襲の前日になりました、
 これが第二警戒配備から、第三警戒配
 備になったわけなんです。第三警戒配
 備になったわけです。第三警戒配備と
 いうことは、もう敵は来んぞと、平常
 に戻れという配備指令なんでございま
 す。

それで、敵の機動部隊がほかへ行っ
 てしまったということが頭にあります

んで、それとということ、特にパイ
 ロットなどはもう、きょうあつてあす
 ない命なんですから、一刻でも生きる
 ことの楽しみを勝ち取ろうという、そ
 れはもう無理からぬ気持ちなんです、
 パイロットの大半の者が夏島へ行つて
 しまったわけなんです。

当時夏島には、いろいろいっぱい飲
 ませる料亭などもありまして、日本か
 ら女性も来ておりました。これも私が
 行った当時、こんなところまで大変
 に驚いたわけなんです、そういうこ
 とで、特にラバウル方面で活躍した人
 たちは、トラックに帰ってきて、一息
 入れるという感じの要素が、トラック
 島は非常に強かったわけなんです。

そういう意味で、よし、敵は来んぞ
 ということで、みんな夏島へ行つてし
 まった。これがトラック大空襲の大被
 害を受ける第一の原因でございませう。

索敵の失敗

なぜ、第三警戒配備にしたかとい
 う質問も、当然だろうと思えますが、
 私は一介の冬島電探の所長でありまし
 て、その当時、四艦隊司令部にはどう
 いう情報が流れておって、その情報を
 どういうふうに分して、そういう結
 論を出されたのか、これは私が知るす
 べもありません。

ただ、常識的に考えて敵がメジューロ

(マジューロ)方面におる、それが西方
 海上の方向に動いているという大まか
 なアメリカ艦隊の動きについては、当
 然上層部の方々は、いろんな情報によ
 って把握されておつたんじゃないかと
 思います、この情報の不足、これが
 あらゆる海軍の作戦の齟齬をきたして
 おります。

私は、その一番大きな要因は、あの
 優秀なる潜水艦が情報の提供者として
 十分活用されなかったこと、これが何
 においても一番大きいことだと思いま
 す。特にガダルカナルにおける潜水艦
 の消耗というのは、本当に惜しい。本
 来の任務以外のこと、大いに消耗して
 しまった。万やむを得ない事情があつ
 たんでしようが、それが大局において
 非常にロスであつたということを、申
 し上げて過言ではないと思えます。

トラック島も、毎日、索敵機を出し
 ておりました。これは毎日、司令部か
 ら何度方向に何機、天山、艦攻が行く
 という、通報はいただいております、
 もちろんこれは電探に入りますんで、
 こっちのほうへ索敵行つたよというふ
 うに、私も判断しておるわけなんです。
 的確な情報を得るためには、その索
 敵と、もう一つは敵信班、いわゆる外
 信班の情報収集が必要で、これは夏島
 に四通がありました。

敵は通信管制などを当然行つておつ
 たでしょうけれども、外信班はある程



夏島方面から見た竹島。まさに不沈空母の感じがする。

度、敵機動部隊の動きについて、ある状況判断を持っておったと思います。この四通の外信班が、どういう情報を司令部に提供し、司令部がそれをどういうふうに判断したか、これが一つの大きなクエスチョンマークなんでございます。

残念ながら、機動部隊の来た当日、索敵機は出ましたけれども、これは足の長さの問題もありましょうし、ついに敵の艦隊を発見し得なかった。ご承知のように、索敵は人間の目で見るともでございますし、やはり燃料の問題もあって、足の長さに限界がございます。索敵で見つからなかったらこないという判断では、非常に危険なわけなんです。

その当時の、第三警戒配備としたことの判断、これは私もいまもってわかりません。ただ、その判断が誤ってあったことは、結果的に明瞭でございます。スプルーアンス提督の率いるアメリカの第五十八機動部隊は、昭和十九年二月十七日、トラック島の北東方面から約七十機の艦載機を三回に分けてトラック島に向かわしたわけですね。

トラックの電探は優秀だった

皆様もご存じのように、電探は高度が非常に高ければ障害物がありませんので、非常に明確に敵機をとらえられ

ます。また、トラック島に配置された電探は極めて優秀でありました。これは日本の技術の優秀さを左証する、ついに終戦の日まで一日二十四時間休みなく第一、第二電探を回し続けましたけれども、故障の起きたことは本当にほんの数時間。あとは故障もなくその目的を一〇〇%以上達しました。

機動部隊の空襲があった時も、もちろんこれをとらえまして、その都度司令部のほうに通告いたしました。その通告によっていつ空襲警報をかけたか、夏島の事情は私は冬島におりましたんでわかりかねますが、もうほとんど空襲警報の直後敵が襲いかかってきたわけなんです。

パイロットは夏島へ行っていた

なんせ、第三警戒配備によって大半の優秀なパイロットは夏島に集中しておる。ご覧のように、当時の航空基地は竹島、春島、楓島、この三方所にあつたわけですね。夏島から、それらの島に向かうには船に乗って行かなきゃいけません。敵の艦載機がブンブン飛び回っているところで、船で各航空基地へたどり着くことは、非常に至難の技でございます。と同時に、大変な時間を要することも明瞭でございます。

その時の航空基地の状況は、私も担当のものじゃないのではつきりは申



加藤邁氏（左）と杉本作兵衛氏

し上げられませんが、本当の練習生程度の人しか残っておらなかった。これが事実のようでございます。

後時、いろいろ話を聞きましたけれども、結局、敵の機動部隊に立ち向かって行ったのは、まだ技術未熟な、練習生程度の者だけだったということで。優秀なパイロットは残念ながらその能力を発揮することもできずに、夏島において切歯扼腕をしておったわけなんです。

十七日には、決定的に海上をやられましたですね。海上の艦船を集中攻撃いたしました。なにせ先程申し上げたように、環礁の中で思うように操舵ができない。そこへ敵の機動部隊がくるということ、まさに敵方から見れば右往左往ということになります。もう好個の餌食で、私も冬島の上から、目をかすめてグラマンがダイビングして行くのを、ほとんど夕刻になるまで見ておりました。ちょうどハワイの空襲を裏返したような状況がそこに展開されたわけなんです。

あの第一警戒配備の体制で、この敵の機動部隊を迎え撃っていたら、これはもう敵の空母その他に多大な損害を与えたと思って、本当に残念で残念で、それはいま思っても残念に思っております。まあ、これもとりもなおさず情報不足によって、判断の誤りが大きな犠牲を生む結果となったわけです。

その機動部隊がきて以後の件については、いろいろとご質問に答えて具体的に話したいと思っております。

その前に、私が着任した十八年の十二月以前のトラック島はどういう状況であったのか、これは杉本作兵衛さんが、軍需部におられて当時のことをよく知っておられますので、ひとつお話をさせていただきたいと思っております。（拍手）

当時、非常に乾燥していた

杉本 私は静岡県島田市阿知ヶ谷に在住しております杉本作兵衛でございます。

加藤さんのように的確かつ鮮明なお話ができないと思いますが、加藤さんの四十年前のご記憶にはつくづく驚きました。なんだか立派に再現されたような感じで、本当にびっくりしました。自分の年を申し上げますのは、恐縮でございますが、私は昭和十二年徴兵検査で第二乙でありました。一般で曰く、お前のような小さいコビトが兵隊になったら日本は終わりだといって、私は非常に悔しく当時思っております。

しかし、身体は元気だから、チビで小さくても、やっぱり何か役に立つようにと思って、いろいろ手を打っておりましたところが、赤紙でなくて、白

紙の令状が来て、それで横須賀へ集合すると、昭和十七年の七月二十九日、トラック島の第四海軍軍需部へ勤務することになりました。

私はそこで、こんな人間でないような小さいものが一死報国の精神で、とにかく頑張って一生懸命国のために尽くすんだと、そういう気概を持って一生懸命、作業に当たっても、人の嫌う仕事を私は率先してやって、また同僚をうんとつくったんです。それをつくるには、やっぱり、できるだけ物質でない親切をみんなと分かち合っていたんです。

ところがそれをたまたま取り上げてくださったのが、下士官で、おっ、お前は俺のところに来てボーイになれということ、朝昼夕食の食料品と、なお各出張先への弁当など、そういったことと、それから下士官、高等官の身の回り品、洗濯から、身に付けた一切のものを、私は面倒を見ておったわけです。

それは毎日の日課であって、空襲になるまで安穩としてずーっと過ぎておりました。そして私の職場はいつなんどき、職場から帰ってきたりする下士官もあるし、または各船からの呼出などの特急の用事がありますので、そういったことを全部口頭で、二階とか、兵舎へ連絡するために、身体は小さいけれども、三大声人だといわれるよう

に声が大きくなったのは、そのせいだと思います。

そして、大空襲までは下士官ボーイをしておりましたんですが、大空襲以来は、突貫工事やら、全員昼夜を分かたず緊急作業の連続でした。

そしてつらつら思うに、この大空襲は、いま加藤さんから、本当に鮮明にお話がありましたので、私は端のほうから申し上げますと、実はこれは天候の条件にも相当左右されています。

というのは、当時、大体一カ月半ぐらいもスコールがなく、あらゆる地上の草、または木が枯死状態になってしまっている。飲料水にも事欠く次第で、飲料水の大半は、ドラムカンへスコールを入れておりましたんですが、そのドラムカンはからからなんです。そして谷間から流れる多少の水をためておいて、これは艦隊への給水、船に対する給水に使いました。それは確保しておかなくやいけない。

大体十二月から二月までは乾燥期に入るわけですが、特にその昭和十九年という年は、稀にみる乾燥期であったんです。当時は土人、いまは島の人のいわないと具合が悪いという話も聞きますが、土人は全然靴もはかず、裸足なんです。裸足でパタパタと歩くと、土人の足の裏だけが真白い。その白いところが見えずに、大体五十センチぐらいは、その土がそのまま上に上

がって、埃がモウモウと上がるような乾燥の状態でありました。

その乾燥をしている最中に、一月の十五日、トラック島の支庁庁舎の荷物の置き場から火が発生いたしました。これがそう大火事ではないですが、山の上ですから、あれよあれよと見ている人だらけで消防隊も水がないところへ、何を持って行くわけもない、棒のようなものを持ってきて叩いたり、また荷物は山からどんどん転がり落とすような大騒ぎをやったのを、端から見ているようなわけです。

その時、一人の現地人が、これはボーイさん大変なことになりますよという。なんだといったところが、正月中に火事がある場合には、非常に危険な場合があり得るといいました。それは私の日記にも書いてありますが、さて何が起るか、それは判断できませんでしたが、大体、何か起こるといえる可能性は、私も信じておりました。

日の出前に敵機がきた

二月の四日、米軍機が二機きました。
〔司会者注・諸戦史に一機説あり〕。
まだ空襲警報はなりません、騒ぎ始めましたし、ブルンブルンという異様な音は日本機ではないということを探しまして、そして見上げて、行く手はずーっと見ていましたんですが、その

時、私は武蔵が高射砲を撃ったと思いましたが、いや、そうでなくて高雄が一斉射をしたのだそうです。

そうしている間に、ちょうど私の目の前が竹島基地ですから、零戦がそれは凄いい勢いで、あとを追っ掛けたんですが、いくら足の早い零戦でも追いつくことができなくて、それで私が見失ってからは、皆さんに聞いた話では、やはり春島の海上を東方へ去ったということを聞きました。

私は下士官のボーイをやっています、たが、下士官が夏島だけではなくて、秋島、春島、各所に作業に行っており、その方たちの各所においての観察が、いわゆる私が聞いたようなままとまりの話になったと思います。

そして、一月十五日から二月の四日と事態が変わってまいりまして、いつか近いうちには空襲があるのではないかという予感、皆さん持っていたわけです。

ところが、私は下士官の食事を担当している以上、朝は大体起床が三時。三時半には炊炊所で、ご飯の釜に火を入れるために、三時には起きて炊炊所のほうに飛んでいきます。その日は私が火を入れたわけではないですが、ちょっと表の空気に触れようと思っ、真っ暗い中で、空をひよっと見回したところが、流星ではないです。火花がスーッと走るんです。

あれ、ちょっとおかしいなと思って、よく見ましたところが、音がまた、零戦の音とは違うようなわけで、真つ暗闇にただ曳光弾だけが走る。とにかく私の判断では無理だからと、下士官宿舎の廊下を、ドカンドカンわざと振動させて、目をさますようにして、どうか皆さんちょっと見てください、空が異状ですと報告しました。

とにかく一度空を見上げて、そして確認してくださいと、下士官宿舎を左から右へ飛び回って、皆さんを起こして、皆さんが裸のまま飛び出してきて、ガラス戸越しに見て、さらにガラス戸を開けて見ました。

それからもう十分、十五分、たつたたたないうちに、もう曳光弾が走るよりもなによりも、あちらにもこちらにも、ほとんど飛行機が多くなって、旋回しているんです。それで私が、どうやらどうも空襲だといって、下士官も空襲だ空襲だ、早く身仕度をしてということになりました。

もうほのぼのと東のほうは白けます。その時分には空は茄子紺から青紺色に変わって、茄子紺はどす黒いですが、青磁の色。そういう中に、私が指折り数えただけでも、大体三機から五機編隊が十八群ぐらいいは数えましたけれど、あんまり見てもいられない。とにかく兵隊、下士官、全員とにかく本庁舎の前へ一応集合となりました。

地上の零戦が燃えた

全員貴重品を持ちたりして、総員が集まったのが五時ごろなんです。その時まだ、空襲サイレンは全然鳴っておりません。大体、空襲サイレンが鳴りましたのが、五時二十分ごろでしょう。

その前にも、第一見張り、私の頭上の第一見張りは、もう機銃をドカドカ撃っていました。機銃を撃ちはじめたのは空襲警報前だと思えます。しかし、私ら度胆を抜いていましたんでわかりませんが、三枚の赤い旗が空襲警報の印で、ことによると私の耳に入らなくて、空襲警報がなっていたかもしれせん。とにかく機銃のほうを劈く音であったものですから、このほうが逸早く私の耳に入りました。

私が発見してから、大体三十分以上ぐらいいは、素人の目で見ても時間がかかっているようなわけです。それからもう南洋の太陽はぐんぐん昇天が早く、もう五時四、五十分、六時前にはもう真昼間のように明るいわけ。
〔司会者注・一九八二年、シンガポールのマルゼン・エイシア社から、Klaus P. Lindemann 著の「Halstorm Over Truk Lagoon」が出版されており、いまのところ、トラック空襲については、同書が最も詳細と思われる。〕

同書は空襲当日の日の出を六時十分

とし、第一波がトラック上空に達したのは日の出少し前としているが、同時に、日本軍の時間は現地時間より一時間遅いと述べていることから、空襲は日本軍の用いていた時間の五時ごろ始まったと考えられる。〕

そしていつも私たちは大体、六時半の朝食ですが、いつものような朝食をしている間もなく、とにかく庁舎の前へ集合して、ただ、皆さん空を見上げて、どうなることかと心配しているだけでした。

竹島を見ますと、竹島のほうは、それから始まりました。竹島には翔鶴から数日前に降りました数十機の零戦、これが、地上に待機の姿勢で、搭乗員なしで野良にあった。

バラバラバラバラ音がするけれども、何だろうと思ったら、敵の機銃掃射で、このほとんどの零戦に火の手が上がったようで、その前には、ドラムカンが三段積みぐらいいで山に積んでいたのが、爆弾で、機銃でもって穴を開けられて火の手が上がる。

その火の勢いというんですか、ドラム缶が大体五十メートルぐらい空中高く吹っ飛んでは、空でボンと撥ねるんですから、重油とかガソリンを空から降りまいて、それに火がついているんですから、もう、竹島の飛行場は全然、私どもの目には見えないんです。

さらに、竹島の飛行場のまわりの土

煙が、砲台のほうまでかぶさっちゃって、竹島は埃の中に入ってしまった。竹島が見えなくなってしまう。その中で、でかい音が、これは竹島の十二センチ砲、第一番砲台と第二番砲台の砲音ですが、いやあ、やたら撃て撃てとって撃つたと思います。とにかく空で破裂する、これは空高くない敵機をねらったかも知れません。

とにかくもう撃つは撃つは、相当撃つんですが、こちらのほうは間隔がトン・ドカン・トンというんですが、敵のほうは、カンカラカンの中へ、ばらばら弾を百ぐらい入れて、それを振り回したようにバラバラバラバラ……というように、彼我の差がきついわけなんです。

まだ防空壕はその時にはなかったんです。われわれは大概、ちょっと小高い物があれば、その陰に隠れまして、とにかく友軍を心配しながら、もう、手に汗握って、そして自分が危険な状態から逃れるよりほかにすべがないわけなんです。

ところが、幸いといつてはなんです。敵は最初、目の前の竹島飛行場を散々叩いて、飛行機が上がらないようにしておいて、あとはもう艦船を片っ端からねらって行くわけです。それで私たち陸上部隊は、それほど被害を受けなかった。

退避、退避と船に叫んだ

制空権をとられたものですから、船のほうはエンジンをかけると同時に、汽笛を一斉にヒューヒューヒューヒュー鳴らし放してもって退避しようとはしますが、エンジンがかかっても、船は進行しない。それへ敵機が突っ込んでくる。

そういう状況を目の前に見て、同胞はもう手を振り上げちゃって、オーイ早く逃げる逃げる逃げると二町も先の船に向かって、声を限りに退避退避と叫んでいるけれども、届くか届かないか、それはわかりませんよ(笑)。

あの時の船の被害はひどかったです。小さいのは動きが早いです、細かく立回りができるんですが、やっと避けられたのが、大体六時半から七時にかけてですか。でも、その時はすでに、私の前にいた燃料タンカーが、ジャンジャン火を吹いておりました。しかし、ちょうど私の隣りで心配していた燃料主任がもう、きのう燃料を降ろしたので燃料は助かった、空船だけだ、とにかく早く逃げてくれと、いっておりました。

何にしても、皆さん全体になって退避退避と叫び、とにかく無事を祈るように、奇蹟が起こるように、本当に皆さん力いっぱい声援を送っていました。

た。

そして大体、ボチボチほかの陸上施設を狙い始めたのは、お昼ごろでしょう。その時には、烹炊のほうの煮炊きした食事では間に合わないの、カンパンを担いできて、その袋の口をさいて、一応好きなだけ持って行って、防空壕はないのでジャングルの山の中に退避している、命令を待つようにというのであったんです。

その時は、私も弱音を吐くようですが、もうガタガタガタガタの奥がガタ鳴りになりました(笑)、そして、いくら奥歯をかみ締めても、このガタ震いが止まりません。今まであんな震えたことは初めてなんです。あとでは、本に書かれる武者振いというのはこのことじゃないかと思っておりますたわけ(笑)。

しかし陸上のほうでは、それまでにやられたというような人もなくて、それから陸上を狙うようになりましたが、その前に高等官の防空壕は一つ掘ってありましたんで、これは女子職員と一緒に、満杯でしたけれども、その辺に身を隠すようにという命令が、庶務主任からありました。

それもなるだけ、皆さんかたまっておると狙われますから、できるだけ散らしてもらいたい、こういう注意もありました。

とにかくそういう状態で、午後にな

ってからもう一つは爆弾が降る恐れがあるんじゃないかということもありましたんですが、やはり艦爆ですから、大きな爆弾はありません、機銃掃射だけが一番の威嚇でもって、音のほうで大概参っちゃったんですね。弾というもの、そんなに当たるようなものじゃないんですよ。

ただし、パッパッパッパッと機銃弾が当たって行くと、それが二メートルぐらいの高さの土煙になって、パッパッと塀をつくっちゃうんですね。それがもう左にも右もあるんだから、非常に危険を感じますが、その間に不思議と誰も直撃でパッとやられたことはないんですね。これは本当に奇蹟なんだと思います。

竹島砲台の状況

杉本 いま静岡市におられる山内兵曹長が竹島の砲台長だったので、このかたから竹島の様子をちょっと聞いてきましたから、それをちょっと申し上げます。

不沈空母ということがいわれますが、竹島は本当に不沈空母だったんです。

それで私は竹島は不沈空母だったから、組立から何から施設が全部あったんですかといったら、砲台と滑走路のほかは、弾薬庫があっただけで、ただ筒抜けの防空壕があっただけだった

うんです。私もこれを初めて聞いて、びっくりしたわけです。

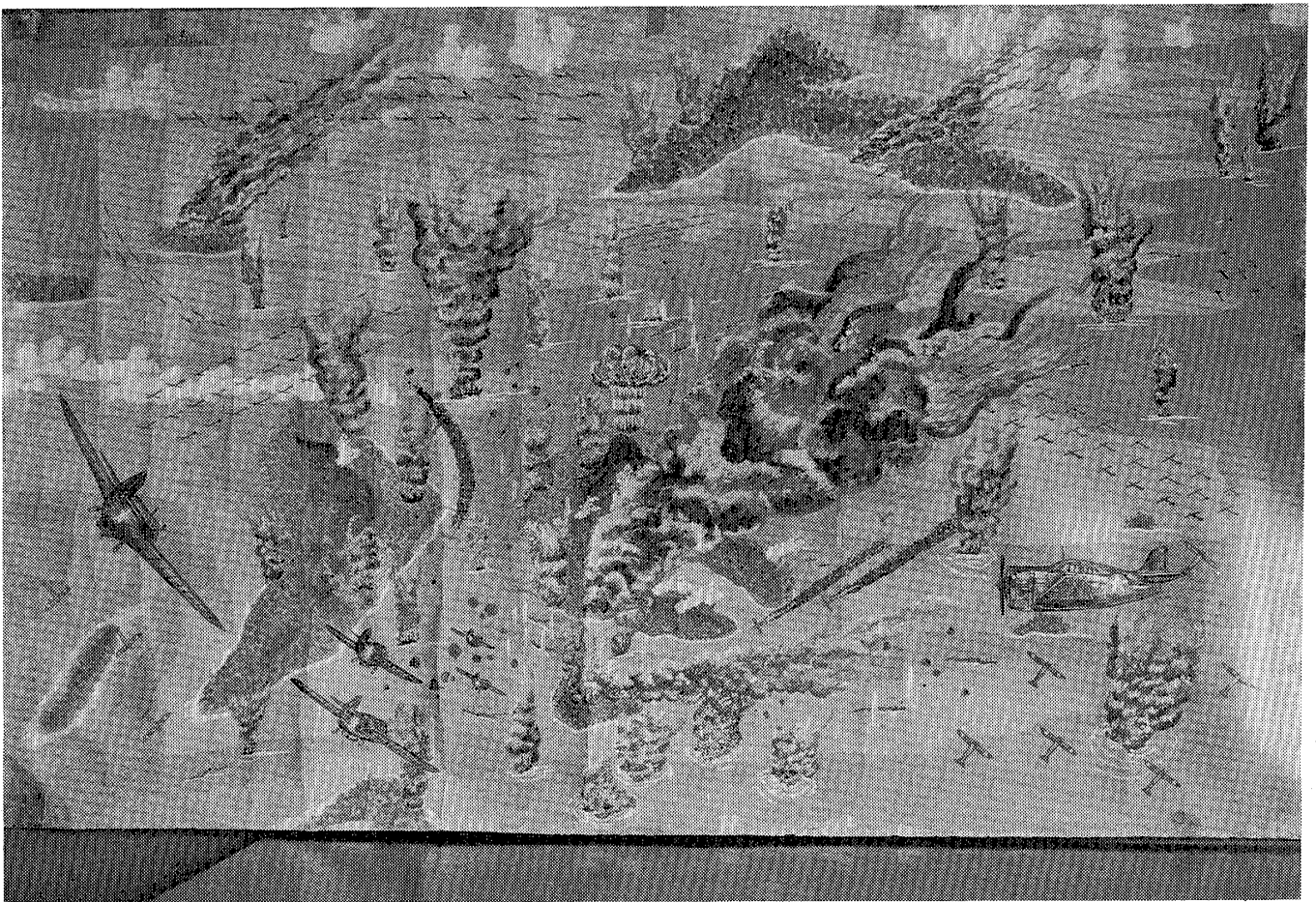
ですからトラックの基地は、アメリカのほうは怖がっていて、日本のほうでは頓着なかったような、絶対の信頼を持っていたらしいですね。

竹島砲台は、撃って撃って撃ちまくったんですが、いかにせんこれ十二センチ砲の二連装ですが、三千メートル以上のものを、とにかく威嚇しただけでもって、どうしようもない。山内兵曹長によれば、終戦まで対抗したのは、第二砲台の機銃一基だけだそうです。

トラックは飢餓の島となった

加藤 皆さんからいろいろご質問もあるかと思いますが、ご質問をお受けする前に、終戦までのことを駆け足で申し上げておきたいと思っております。

とにかく二月十七、八日の大空襲、そのあとに引き続き、天長節を明らかにねらったと思いますが、四月二十九日、三十日と、これまた徹底的な機動部隊の空襲があったのでございます。それによってトラック島の防衛を建て直さなきゃいかんということで、空襲当時の小林仁中将が更迭されて、新しく原忠一中将が第四艦隊司令部の司令官として、着任されました。主席参謀としては今里義光大佐、この方は海軍の防衛の権威でございます。



杉本作兵衛氏の描いたトラック空襲の図。タタミ3帖分ほどの大きなものである。

今里大佐が主席参謀として着任されました。六月ごろだったと記憶しております。航空参謀も田村航空参謀、現在は長谷川さんとおっしゃっておりますが、田村航空参謀が着任されたわけなんです。参謀長は澄川少将でございます。

原中將が着任されて、それからいよいよトラック島の本当の防衛計画が実施されたわけでございます。

海軍は攻めるも攻めるも、もう攻めるほうは大好きです。これはあに海軍ばかりでなくて、日本人全体がそうでございます。川中島にしましても、やっぱり攻める謙信のほうが格好がいい、受けて立つ信玄のほうがなんかやっぱり格好悪い。日本人全体が、守るより攻めるほうが非常に好きな民族であります。

そういう意味でトラック島もこの範疇を外れず、やはり守ることは男子の本懐にあらずと、一種の恥辱感を日本人全体が抱いていた。当時は特にそういう気持は強うございました。そういう気持があったから、やはりトラック島をいかに守るかという観点が欠けておったことは明瞭でございます。

先程、杉本さんが縷々詳しくご説明されましたけれども、まず何万トンも入る石油タンクを露出させておったこと。これはもうラバウルがあんな苦しい状況になって、敵の機動部隊が来る

のは目に見えております。なぜ重油タンクを各島に分散しないのか。

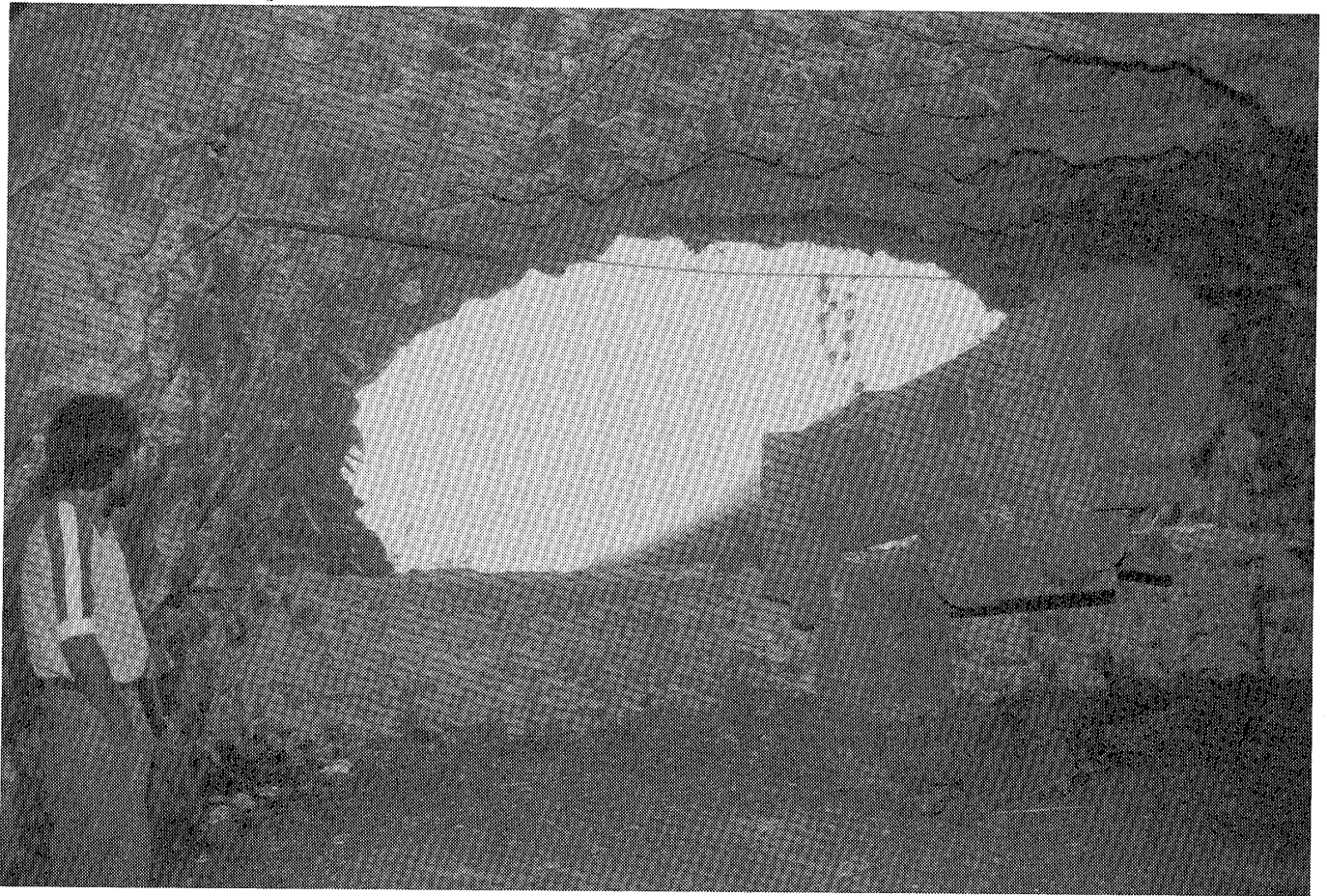
それから、膨大な食糧を山積みにしておった。ちょうど竹島の向かいのところです。私は冬島の山の上からいつもそれを見ておりました。あんなところに山積みして、なぜあれを各島に分散しないか、その心配がずばり当りました。

石油タンクはもうもうとして天を沖し、あの貴重な食糧は、大きな一つのビルみたいになって、山になって焼け焦げちゃった。それ以後のトラック島はまさに飢餓地獄でございます。

原長官が着任され、今里さんが防衛の態勢を敷かれまして、敵の機動部隊に備えて、約一ト月の食糧は絶対手を付けるなど。米のめしを一つぶも食うなということで、各部隊の食糧も全部食べてしまうことを禁止して、お互いに自活のを生み出せということになりました。それでは芋を植えようということになったわけです。

暑いところですから、芋も育ちましようけれども、芋を植えると夜盗虫という虫がわんさどつくわけです。一晩のうちにもんな食べちゃうという恐ろしい虫です。この虫との戦いが激烈なものでございました。

それでその芋が育つ間、バタバタ栄養失調患者が出たわけです。トラック島に私は約四万人おったと記憶してお



日本軍の要塞砲（春島）。一発も撃つことなく終戦を迎えたという。

ります。海軍二万五千の、陸軍一万五千、大まかにいってそんなものじゃないかと思いますが、そのうち、終戦までに栄養失調で死んだ者は、やっぱり五千人ぐらいあったんじゃないか。

ともかく私は昭和五十年に杉本作兵衛さんと一緒にトラック島の最終の遺骨収集にまいりましたけれども、ともかく陸上で六千、海中で二千、大体、八千人は死んでいるんじゃないかと考えております。その陸上で死んだ大半は飢え死でございます。これは食べるのは芋だけ、おなかが空くから、そこから辺の南洋ほうれんそうなんかとって食べる、下痢するというようなことで、まさに幽鬼のような形でみんなさまよい歩いておったんです。

要塞化完了は終戦の日だった

これは私事で大変恐縮なんです、私は山の上におりましたんで、部隊の回りにタピオカをいたるところに差しちゃう。タピオカは、いわゆる名古屋ういろの原料になっていますね、あのねっちりした。これは根に芋がつくわけですね。それを植えたわけです。

それから、パンの木を削り抜いてカヌーをつくりました。漁撈隊をつくって、環礁で魚を獲らして、燻製にしてみんなに動物性蛋白をとらした。こんな部隊はほかにありません。大変

私のところは恵まれておった。終戦になるまで私のところはピチピチしておりました。

しかし、ほかの軍人、特に軍属、飛行場づくりに汗水たらした軍属の人たちは、本当に地獄でございます。一匹のトカゲをとるために、大の男が死物狂いで争うというように、食べられるものはなんでも食べました。

パイヤの根っこは大根おろしに入れて食べましたし、椰子の芽はちょうど竹の子にそっくりなんです。椰子竹の子というのを食べました。タバコもないんで、胡麻の葉っぱからお茶殻から、いろいろ吸いました。あとにはタバコの種を配給されました、タバコをつくりましたけれども、ともかくみんな必死で自活体制で入ったわけです。

と同時に、今まで露出しておった各砲台、これを全部岩盤の中に入れたわけです。この工事が各島始まったわけです。春、夏、秋、冬、水曜島、金曜島、木曜島、これらの環礁に向かっておった各砲台を全部岩盤の中に入れておく、どこもかしこもカッチンカッチン、爆弾から火薬を抜いた道具で、洞窟をつくり始めたわけです。それがやっと完成したのが、ちょうど終戦の日でございます。

あの空襲時にこの態勢でおったならば、ああいう悲劇は起きなかつたらうと、つくづく歴史の皮肉を感じるわけです

けれども。原中將と今里さんが本當にトラック島を要塞化した、それが完成したのが、なんと終戦の日であったという事は、まことに皮肉なことではないです。

杉本 もうこれからいいぞといったらね、終戦になっちゃった(笑)。

前向きに生かして欲しい

戦史の教訓

加藤 それからは進駐軍がきて、いろいろ復員の事務が行われたわけです。南水道にスタッフという駆逐艦がまいるまして、そこで終戦の業務の打合せを行いました。私も参謀長の命によって、参謀長とご一緒にそのスタッフに行きまして、このトラック島並びにカリン海域の終戦の打合せを行った次第です。

それからあとは環礁内の機雷を全部処理いたしました。この処理中にも、朝日ビールの社長をしておられました高橋さんの弟が、四艦の司令部において、私の同期生でございます。せっかく終戦まで命永らえたのに、機雷の処理で死んでしまいました。そんな突発事故がありましたけれども、掃海が終わって、いよいよアメリカのLSTがバリーと乗り込んできたわけです。そして春島の第一基地、あそこにバリーとLSTがみんな乗り付けてきた

わけです。私もそれを見た時に、まあこれは一つやっぱりアイディアで負けたなという感じがしましたですね。これありせば、あんなにちらした荷揚げ作業をしなくても済む。

日本人というのは、一つのアイディアを育てようとしません。なんかという足を引っ張る。後年、私、ホンダ技研の本田社長に伺って、非常に感銘を受けたんですが、アメリカ人というのは十のうち九つ欠点があっても一ついいところがあれば、それをみんなで伸ばそうとする。日本人というのは十のうち九つ長所があっても一つ欠点があると、みんな欠点を拡大しようとする。そこに大きな国民性の違いがあると。私はまさに至言だと思いましたね。

日本人ぐらい頭脳の優秀な国民はないと思います。これは一年間アメリカの兵隊と付き合っつくづく思いましたね。ただ、彼らは非常におおらかなので、素直ですね、やっぱりものを育てようとする大きな地盤がある。日本人は利口過ぎて、本当のアイディアがそのまま生かされて行かない。そういうところにもこの戦争の一面を物語るものがあるんじゃないかと、私はLSTを見てつくづく思いました。そして次から次へ帰って行って、昭和二十一年の十二月に、全部引き揚げたということなんです。

概括そういうことなんですけれども、

その間のいろいろ悲劇喜劇、それを私たち同士で、なんとか私たちの体験を後世に残そうじゃないかというわけで、素人が集まりまして、『トラック島海軍戦記』(昭和五十八年刊)というのをつくりました。これは水交会にもご寄贈させていただきましたけれども、トラック島を基点としてラバウル方面に行かれた方その他、トラック島はやっぱり海軍の心の故郷ですから、皆さんから大変喜ばれました。

また、アメリカのカリフォルニア大学とか、あるいは合衆国議会からも是非送ってくれというご要望がありまして、つくった甲斐があったと思います。

しかし、私たちのそういう苦い経験を、今後のことに生かして行かなければ、ただ、昔の懐かしい思い出話に終わってしまうんで、ここからどういふうに出発するか、もっと前向きな形でこの体験を、これはトラック島といわず各水域で苦い経験をされた方が、これからの日本について、そういう体験に基づいて、貴重な意見をいろいろお持ちだと思いますが、そういう形が出てくると、私は、こういう話も非常に意味があるんじゃないかと考えた次第でございます。

トラックに行かれない方は、私たちの話だけではちょっとわかりにくいかなと思います。いろいろご質問もあると

思いますので、私たち二人でわかる範囲はお話申し上げたいと思っております。

司会 どうもありがとうございます(拍手)。

皆さん、いろいろご質問があると思うんですが、まず、市来先生から一つコメントをいただきたいと存じます。

市来 非常によく当時の状況はわかりました。私、トラックはただ通り過ぎた程度で、当時の実情は全然体験もしてありませんし、『戦史叢書』を見ましても、やっぱり陰に隠れてわからないところが随分あるなということが非常によくわかったと思います。

やはり一番大事なことは、最初お話にありました、情報の収集ということが適切でなかったということが、一番最初の立ち上がりをまづくし、ああいうふうな結果になった一番の原因、最大の原因だろうと思います。

その情報収集の手段として、当時行われましたこと、航空機による索敵。お話にありましたように、どうも機動部隊がきているらしいという、通信情報から索敵機を出す。だが索敵機の結果では情報を得ない。そこで指揮官が、第一警戒配備からいきなり第三配備にされたところが、非常に大きな問題点でもあろうというふうな気がいたします。

やっぱり情報収集の手段というものが尽くされたならばというふうな悔いがどうしてもやっぱり残ります。それで今後の最大の教訓としましては、これは、こういうふうな場面に限らず、日常われわれの仕事をやっている場合でも同じでございますけれども、できる限りの情報を集めて正確な判断をして、また正確な処置をするということが大切であります。

現在でも、普通の企業経営において同じことで、このトラック島の教訓というものは、いろんな面で取り上げられるべき問題でもあります。

そういう意味で、いま残っておられる、体験された方々のお話を集めて、本にされているんだらうと思えますけれども、そういうところを生かすように加藤さんがおっしゃいましたことは、大事なことでないかというふうに感じました。

それから索敵の手段としましては、当時、航空機は足が長いし、遠くまで出られますので、航空機を主体にされているんです。また索敵計画というのも、たとえば『戦史叢書』あたりで記録に残っているところでは、竹島を中心にしまして、何度の方向に何哩だと二百五十なら二百五十、三百なら三百というふうな図面が書いてございますが、図面だけを見ると非常に立派に搜索はやられたように、また全周をやら

れたように、誤解を生じやすいわけですね。

ところがその当時の飛ばせる飛行機、手持ちの飛行機のうち、可動何機ということがあります。あるいはまた索敵計画で、大体、一日、朝明け方から日の出前後に早目に、どうも怪しいという方向に対して、密度としてはやっぱり二機ぐらいしか出ていない。それが見落としたら、ほかのところは大きな穴が開いているわけです。

図面だけ見ると、全周やっているみたいで、非常に警戒をやっているみたいに見えますけれども、実際に子細に見ますと、実際は二月十五日の状況にしまして二機しか、ある方向にしか出ていないわけですね。そうするとほかのところはみんな穴を開けている。

そこらはやっぱり、こういった経過を見る場合も、気を付けてみる必要があるような気がいたします。

また、計画としてはほんとに立派でも、実施のほうで、飛んでいるほうで見落としがございますので、そういう点が積み重なって、こういうふうなことになる。そうすると、索敵の帰った報告によって、司令部が判断するわけですが、そこにまた一つ、この場合には落とし穴があったんじゃないかと思われま。

それからあとは船の搜索というのは

これは足が遅うございますし、やっぱり水上艦艇を使っている。潜水艦についてもお話ございましたけれども、これも飛行機の場合と同じように、しかもまた飛行機の場合以上に行動が非常に束縛されておりますし、非常に難しいんじゃないかなという気がいたしました。

それから、これはハワイの真珠湾攻撃の裏返しみたいな、アメリカにいわせると真珠湾攻撃の敵討ちをやったというふうになっているわけですが、真珠湾攻撃当時といま申し上げましたようなところを比較する。またガダルカナル島のほうに最初にきた時の状況も、これと大体同じような状況できているわけですね。

そこらの教訓というものが、日本の海軍において、やっぱりなかなか生かされなかった、前のやられたことがあとの作戦になかなか生かされなかったということも、われわれとしてはあったと考えるくちやならない大きな問題だと思います。

また、第一次大戦の経験が、第二次大戦に生かされていないというふうなことをよくいわれるわけでございます。戦争の大きな流れを見ました場合にも、こういうふうな局部のことでも同じで、やっぱり前にやられたことが経験として生かされないで、同じ間違いを何べんもやる。今後も、戦争というものが

この世の中からなかなかなくなるのじゃないかと、やっぱり同じことが起こるのじゃないかと思えます。

ですから、トラック空襲から何か伺える教訓があるんじゃないかなと思っ

て拝聴し、非常に感激したところで、どうもありがとうございました。

加藤 本当におっしゃるとおりだと思います。

先日も金日正が死んでいるか生きてるかということ、この情報過多の時代でさえも、もう死んでいる生きているということ、諸説紛々。ああいう状況がこの現代で起こっている。ましてや、あの当時は本当にそういう意味で、情報はまことに少のうございましたね。

私は電探の前に通信学校で暗号をやりました、それで特務班の連中とも一緒に机を並べたわけです。作家の阿川弘之君も私と同期生です。彼は大変に優秀で、特に語学の優れている連中がこの特務班におりまして、いわゆる日本のブラックチェンバーとして、いろいろ暗号解読の仕事をしておったわけです。

私も暗号解読の仕事をやりましたけれども、アメリカのストリップ暗号というの是非常に解きたい。筒になっておりまして、たとえばAが、ある時にはBになる、CがDになるといふ

うに、とうもろこしみたいな、キーを見付けるのが非常に難しいものでした。向うのスパイ網といえますか、情報網の優秀なことも驚くほどです。

たとえばサイパンが攻略されたあと、楓島からY29で逆攻撃をかけるということになりました。みんな大変張り切りしました。それで楓島に工員を集めて、あそこの滑走路を整備する。それで出来上がって、いざY29を飛ばそうとすると、向うが飛んできて穴だらけにっちゃう。その間髪を容れないタイミングの良さというのは、まことに舌を巻きましたですね。

いかに向うが的確にこっちの状況を握っているか。その情報源はどういうふうな組織をされているか。これはラバウルやニューブリテン方面のいろいろな話を後年読みましたけれども、非常に確かな情報を掴むために、向こうはいろんな手を打っておりますね。日本はそういう意味では、なんか通信に對する軽視的な気持がまだ抜け切れない。やはり東郷元帥のあの見事な大勝利が、やっぱり日本人血液の中にあるわけですね。それがやっぱり日本は負けないという安直感といえますかな、思えば上がりといえますか、そういうものが日本人の中にあっただんでしょな。

トラック島もそういう意味では大きな教訓を与えたと思います。ただ、こ

こで若い命をあたら南溟の土に埋もれた多くの人たちは本当に気の毒で、私もグラマンに何回か襲撃を受けていますし、爆弾の洗礼も受けました。こうやっておしゃべりをしているのは、本当に不思議なような気がするんですが、生死は本当に紙一重で、遺骨収集で戦友の骨を上げる時には、本当に感無量なものがありました。

どんなにみんな悔しかろうかと、その思いはいまでもあります。こうして生きているのは本当に死んだ友人に對しては申しわけないという気持はいつも持っております。なんとか死んだ多くの連中の死を無駄にしないように、今後それを生かして行くのは、ぼくら生き残った連中の義務ではないかと、いつも思っております。ごさいます。

竹下 冬島の電探で探知する距離はどのぐらいですか。

加藤 当時の私どものレーダーは、いまの回っている電探と方式が違っています、ブラウン管の下部に距離目盛があるわけですね。その上にインパルスが出るわけです。当時私どもの電探の最高捕捉距離は三百キロです。

竹下 電探で探知したあと、夏島の司令部とか、航空隊に對する通信網はどうなっていましたか。

加藤 司令部とは直通電話です。お話をするわけです。刻々、何度方向にと

竹下 普通の無線電話ですか、ケーブルですか。

加藤 海底ケーブルが入っております。索敵報告すると、司令部において、いろいろ照合して、敵か味方か判断する。ブラウン管にはインパルスが出てくるだけで、敵だろうと味方だろうと。敵味方の判定は、索敵の表と照合して、ああ、これは敵だ、味方の索敵機であるというふうに判断するわけです。

竹下 結局は、トラック空襲を最初に受けた時は、電探で全然探知していなかったということですか。

加藤 これはアメリカ軍もいっていませんけれども、電探で探知しております。

竹下 いろんな記録があるんですが、航空隊が竹島で空襲警報が出た時は、もう敵機は頭上で機銃を撃ちよったということなんです。そうすると、向うが艦載機を飛ばしたのが、トラックの北北東九十哩なんです。そこで飛ばしているわけです。

そうすると、向うは低空できたのかもわかりません。低空で来れば探知が難しい。しかし、山の高いところにあるほどのぐらい探知するかわかりませんけれども、とても三百哩とはいかないかも知れませんけれども、空母から飛行機が飛び上がる時は、相当高度をとって編隊を組むわけです。三百哩探知距離があれば、その時は編隊を当

然探知しなければいかんわけです。

加藤 私どもは探知しております。

竹下 そうすると、ついさっきいった通信網が問題になるわけです。

加藤 敵か味方か、敵の機動部隊が来たのかという判断ですね。この判断に司令部で時間を要したと考えるよりほかないですね。

竹下 航空隊にも直接連絡が行くわけでしょう。

加藤 後年、冬島と竹島との間も電話が通りましたけれども、当時は四艦隊司令部だけの直通電話でした。空襲の時は、空襲警報は夏島の艦隊司令部が出すわけですね。私のほうは四艦隊に連絡する。四艦隊から竹島に指令が行くという形です。

竹下 冬島と竹島との間に直通の電話はなかったわけですか。

加藤 後年つけましたけれども、あとになってですね。

竹下 それでは、冬島から夏島を通過って竹島につく間に相当飛翔がかかったということですかね。

加藤 あそこがかかったんですね。何しろこれは機動部隊の来襲かどうかというそれは、いろいろスタッフの間で議論があったと思いますね、逡巡的にですね。私はその逡巡がやっぱり時間をくったんじゃないかと思えます。

竹下 さっきいったように九十哩で飛び上がっているわけですから、高度

にもよりますけれども、この時キャッチしている、直ちに四艦隊司令部に通知されて、そして空襲警報があった時は、竹島はもう空襲を受けておったという状況で、どうもこれがわからないけれども。

加藤 もう亡くなりましたけれども、当時の司令部におられた参謀方も電探はよくやった、よくつかんでくれたと、私にはいつておられました。ともかく、電探の性能はちゃんとキャッチするよくな形になっております。

しかし私どもは、ブラウン管に入ったとおりを報告するわけで、それを敵か味方か判断するのは、艦隊司令部です。艦隊司令部がどういふふうなそれを咀嚼して、航空隊にどういふふうな指令をしているかということ、私は冬島におりますんで、そういう一番大事な機微については、私はなんともいえない。これはもどかしい話なんです。

ただ、電探の機能は十分に発揮できた。これはあそこにおられた方は十分に知っておられると思います。私がいえるのはそこまでです。

司会 航空隊のほうにも冬島から直通で連絡が行くというふうになったのはいつですか。

加藤 私の記憶では、この機動部隊が来たあとですな。直通の電話が竹島

に通じたのは。

司会 それから二月四日に来たのは、B24という記録もありますが、アメリカ側ではPB4Yと書いてあるのですね、これはどのような飛行機なんですか。

市来 PB4Yは飛行艇。四発の飛行艇です。だから、飛行艇ですからね、高高度できたか、あるいは低高度できたかどっちかです。高高度できたと思います。

竹下 もう一つの記録には、B24の哨戒機だったという話もあります。あれが、ソロモンのムンダからタロキナに進出して、タロキナからトラックに飛んだというんです。トラックまで八百哩ぐらいしかないわけですね。十分航続距離以内にあるわけです。するとB24は飛行艇じゃないから、高度も高いし、速度があつて、高高度では零戦よりも速いくらいですからね。とても捕捉できないわけですね。どちらの記録がほんとかわかりません。

加藤 それから、アドミラルティ諸島というのを……

竹下 あれを日本がとられたのは二月の二十九日ですからね。それであそこから、あとから相当空襲を受けているわけですね。

加藤 その後の定期便は、みなあそこからきたんです。

竹下 あそこには、ソロモンにおつた第十三空軍という航空部隊がグリーン島に出たんですよ。それが主としてトラックを空襲するし、そして第七空軍という陸軍の空軍がクエゼリン（クワゼリン）辺りにおつたわけですね。それでクエゼリンからトラックを爆撃して、アドミラルティに行ったり、アドミラルティから出て、クエゼリンへ行ったりする。

トラックのその後の空襲は、空母部隊だけではないわけですね。

加藤 もう十九年は神経戦でね、寝られないんです。三時間おきぐらいにくるんですから。

司会 加藤さんのところでは、防空壕なんかをつくつたのはいつごろからなんです。

加藤 私が着任してすぐつくりました。とにかく石を積みというわけで、山の上に岩を積ませました。待避壕といいますが、石を積みか、石を築かせたんです。後年は、機動部隊が上陸することを考えて、山の中に、バートとトンネルを掘りましたけれども。当面は、石を積みました。それで命拾ひしたんです。私どもは十三ミリの四連装だったんです。これは戦艦伊勢から降ろしたんです。これで敵に向かったわけ

です。後年また二十五ミリも二連装のがきましたけれども。

司会 そこは何人ぐらいおられたんですか。

加藤 私の部隊は百名です。電測、機関、信号、みんな入れましてですね。どんどん増えまして、最終的には百名の部隊になりました。この連中、みんな元気に過ごさせるように、ぼくは毎日カロリー計算ばかりやりましたな（笑）。

中原 トラック島の水域で、随分御用船が沈んでおるわけですけども、その乗組たちは、トラックに上がったと思うんですが、船員たちは、結局、やっぱり陣地づくりなんかには狩り出されたわけですか。

加藤 私はなんせ山のでっぺんで、年柄年中、敵機を追っております。下のことはあんまり詳しくない。船員の方々はやっぱり港務部というのがありますんで、そこがいろいろそういう船員関係のことをやっておりましたから、そういう方々もやっぱり船がなくて島に残って、いろいろそういう作業に徴用されたんじゃないかと思ひますが、詳しいことはわかりません。

中原 上陸した船員の話はわかりませんが、詳しいことはわかりません。

加藤 船員の方々の消息は、私自身

はあんまり詳しく存じ上げておりません。

杉本 想像だと、とにかく怪我した人は病院へ行く。なおかつ健在の方は一応は警備隊に入るんだよね。あの当時はね。だから、その先はどうなったか私たちにはわかりません。

加藤 現地召集みたいになって、たとえば工作部だとか、施設部とか、軍属さんが現地で召集を受けて軍人になるという形がほとんどだったですからね。

加藤 昭和五十七年に海底遺骨の収集がありまして、この中心になられた方が、あの神国丸という船に乗っておられた方です。亡くなられたトラック島の船員の方々の霊を慰めるということで、厚生省にはっぱをかけて、ついには実現されたわけです。これはテレビで皆さん、十分ご覧になったと思います。

司会 竹島の搭乗員の宿舍というのは竹島にあってですね、熟練した人たちには夏島には遊びに行っていたんですか、それとも夏島にも宿舍があったんですか。

加藤 私はやっぱり遊びに行ったんじゃないかと思えますね。みんな、竹島、楓、春島にはちゃんと基地がありましたから。

杉本 竹島には搭乗員の宿舍はあっ

たんです。宿舍そのものはちゃんと配置されて設備はしてありました。

ところが、飲み屋もないし、慰安所というのは全然この島にはありませんでした。やはり夏島へ行くと、飲み屋もあるし、いろいろとね。

司会 それでまあ、泊り掛けて遊びに。

杉本 泊まりというんですか、島を一步出るには、やはり船で行かなきゃなりませんからね。すぐ、自分の宿舍へ戻るといわけには行かないんです。

市来 第三警戒配備ですから、大体残るのは三分の一ないし二分の一で、あとは外出が許される。だから、第三配備になったために、上陸外出が許されて、まあ、上陸外出が許されない場合もありますけれども。第三警戒配備で、非番の人は夏島のほうに行っていたということでしょう。

加藤 弓をぎゅーっと張ったところにブツと第三警戒配置で、緩んじやつたというのが実情でしょうなあ。

ただ、第三警戒配備でいいのかなという気持は、だれもかれも感じていたと思います。第一警戒配備の後ですかね。それで、そう徹底的にパイロットが夏島へ行つたとは、私も知りませんでした。半分ぐらい残っておったんじゃないかと思つたんですけれども。本当にやっぱり徹底的にみんな行つち

やったようですな。そういう時の流れでしようかなあ。

杉本 私のいた夏島は高い山があったから、やはり多少の地下水はあるけれども、竹島には全然水がない。だから竹島にいた人は、もう涙より水のほうが貴いぐらいだという話が残っていますですよ（笑）。

加藤 ぼくも本当に天水でね。水は本当に大事にしましたですな。内地へ帰ってきて、ジャージャー水道が出ているのを見ると、つい栓を締めますですね、やっぱり。水の大事さというのは身に染みてね。

杉本 食事よりも、穀物よりも、水がありさえすれば、とにかく半月以上二十日は生きられますよ。われわれのことを考えたら絶対我慢できるね。食事がなくても、水さえあれば。

加藤 当時、私が春島に着任した時に、春島の飛行場の青隊といましてね、いわゆる囚人の部隊が、第二基地におりました。私も実はびっくりしたんですけれども、後年いろいろ読むとテナアンとか、ウォッセとか、各飛行場の造成に関しては、あの囚人の人たちの努力は大変なものでしたですね。本当に血の滲むような思いをして、飛行場をつくったわけですな。

それは本当に知られざる歴史のページですけれども、その中には政治犯

でね、心ならずも囚人の衣裳をきて、こういう南方に来て、飛行場づくりをやった方もたくさんおるわけですね。

われわれの中にもそういう方がおられたわけですから、私も着任してそれを見た時には、なんともグルーミしい感じがしたわけですけれども、この囚人のあの方々たちのこの飛行場づくりの努力は忘れちゃいかんと思いますね。

これは北海道の開拓と同じように、ああいう人々、その罪がなんであったか知らないんですが、大変な思いをして飛行場をつくったんですな。

いまでもトラック島の空港の外に青隊の碑が置いてありますけれども、戦争中は非常に悲惨な目に遭わされたわけですな。私はそれを目撃しております。

加藤 トラック島には森小弁とか、ああいう日本の開拓者がいて、いま各島の酋長もほとんど森小弁の子孫が牛耳っているくらいで、日本の開拓者の子孫というのは、いまでも各島に残されておるわけです。

相沢さんという、元高橋ユニオンズのピッチャーしておつた藤沢の出身の人、いまトラック島の一番の実力者です。いま春島に大きなショップを持っておりまして、水曜島の王様です。この方のお父さんの相沢さんと

いうのは、やっぱり森小弁と、初期のトラック島開発をした方です。いまでも日本人に親しみを持っております。

この海の美しさは本当に世界一といわれて、この透明度は素晴らしいものです。

私は五十年に遺骨収集に行った時は艦隊錨地に一隻の船もなくて、ただ大和のブイがポツンと一つ残っているだけで、全く、国破れて山河ありですけれども。

かつては、武蔵と長門が並んでいましたけれどもね。

杉本 並んでいました。

加藤 なんと美しい艦だと思いましたが、同期が通信士士してしまいましたが、こいというんで行ったんですが、うねるような武蔵の甲板は、いまでも忘れません。あのガンルムの奇麗なこと。全くなんとかホテルなんていわれたけれども(笑)。日本人のあの造船の技術たるや、素晴らしいものです。惜しいことですな、あんないい艦をね。

加藤 この席では是非皆さんに知っておいていただきたいのは、あとのことになりませんが、夜間戦闘機の月光、これの活躍は素晴らしかったです。これぞやっぱり日本海軍だと思いましたが、もう、私の見る前で随分落としており

ます。これは終戦まで二、三機残ったんでしょかな。

敵の夜間空襲がきますと、その下のほうから食いついていきましてね、頭の上をバーツと撃って、あのパイロットの活躍は全く勇猛果敢で優秀でした。

それから、作兵衛さんがことしの年賀状にしたのはタコ爆弾ですな。これは十九年の空襲の後ですけれども、残った零戦が二百五十キロ爆弾を抱いてですな、敵の編隊の上に突っ込んでいて、空中で爆発させた。これも相当効果がありましたですね。

司会 そのタコ爆弾というのはトラックで開発したものですかね。

加藤 どうでしょう、それはちょっとわかりません。

竹下 三号爆弾といって、だいぶ前からあったんです。ラバウル空襲、最後はB24になりましたけれども、これがき始めた時に、十七年の大体二月からき始めたんですけれども、十七年の四月に三号爆弾という、三十キロぐらいの爆弾ですね。対空爆弾を開発しておったんですね。それをずーっと終戦まで使っています。B29に対しても使っています。あれはびっくりしたらしい。(笑)

司会 敵の編隊の上で爆発させるわけですね。トラックではこれでだいぶ落としましたんですか。

杉本 落としました。

竹下 編隊を乱せば、勝因に繋がる面もあるわけです。

司会 もう一つお伺いしたいんですがね、二日目の十八日の日にアメリカ側では午前一時ぐらいですか、空襲したということ、『戦史叢書』では日本側には記録がないということが書いてありますね。

『戦史叢書』の六百二十ページの「米機動部隊のトラック再空襲」というところですね。「この攻撃は、わが方の資料に全く来襲、邀撃及び被害状況は不明である」というふうに書いてあるんですが、この空襲はあったんですか。

杉本 いや、頭がこんがらかっちゃっているから、私は記憶ないです。

加藤 その空襲だけ、ちょっと印象にないですね。

竹下 向うの記録は、レーダーを持っている艦爆が、夜間レーダー爆撃をやっているわけですね。おそらくそれのことだと思います。

杉本 私の記憶に残っているのは、三月の十九日に、夜間爆撃だか、夜間偵察だかなんかで、一発だけ爆弾が落ちたのが、ちょうど軍需部の前に野外で爆弾の陸揚げしたのを、野晒してあったでしょう、そのど真ん中にきたもので、誘爆で町が全部焼けちゃったんですよ。その時、一番最初に火が回った

のが、軍需部の酒保倉庫ですね。カン詰が破裂するやら大変だった。たった一つ落ちて行ったのが、ものすごい被害をもたらした。

杉本 そう、三月ですから。

市田 三月ですか。

加藤 もう一度機動部隊がきましたな、連合の機動部隊。あれは二十年だったかな。あの時は敵が甲板で大砲を操作するのを、私はこの目で見ましたですよ。

弾着を観測せよって、司令部からいつてきて見ておったんですよ。水兵が甲板を走るのを見ていた(笑)。ちよるいものだと思っただけ。

なぜ味方が撃たんかなと切歯扼腕しました。

全部砲台は岩盤の中に入れましたけれども、敵の上陸作戦に備えて、そういう向うの艦隊がきたり、潜水艦なんかうろろしていても、砲台の位置を知られちゃうといかんというので、とうとう終戦の日まで岩盤に入れた砲台は一発も撃たなかったですな。悔しい思いは随分ありましたわ。

司会 いざ、敵前上陸で上がってくる時に備えてということですね。

加藤 すべてはそこに集中しましたですな。苦しい栄養失調の思いも、そのための苦しみだったわけですね。終戦になってアメリカ人がどんどん

やってくる、私もアメリカのキャンプの真ん中に持って行かれて、いろいろ毎日のようにアメリカ軍の連中と折衝したわけですけども。硫黄島の日本軍が実に優秀だったということは口をそろえていってしまいましたですね。射撃の素晴らしさをたたえていました。

硫黄島からきた連中は非常に日本の軍人に対して、ある意味で尊敬を持っていましたですね。いかに硫黄島の人が素晴らしかったか。アメリカ人の口から随分私も聞きましたですね。

杉本 トラックでも軍艦がよく戦ったという話です。敵側では、それを全部見ていたんだからね。立派だという話を残しているんですね。

加藤 私は、二日目の十八日に南水道から出て行く秋津洲が敵のグラマンと応戦する姿は、肉眼で見ました。これぞ海軍だと思えましたですね。グラマンが執拗に食いつくのを下からバンバン撃ちましてですね、とうとう沈まらずにパラオのほうに行ったということ、あとで知りましたけれども、あの勇戦奮闘振りは素晴らしいものでしたですね。私の印象の一つ残っております。

そのほかの日本海軍の持てる力を発揮できずにああいう形で終わったことは本当に残念です。

関谷 島と島の間の連絡は、当時、

どのような船で行われていたのでしょうか。

加藤 その当時はほとんど漁船でございませぬ。沖繩のカツオ漁船の方が随分きておりましたから、それに乗りて行きましたですね。

関谷 たとえば竹島のパイロットが行ったりきたりするのはどういう船ですか。

加藤 それはやっぱり内火艇もありますし、大発もありました。しかし、やっぱり限定されるでしょうな、そういうのを使う人は。

関谷 たとえば、空襲だそれ行けって行って、海辺へ行って、それで行ったわけですか。

加藤 間に合うのはやっぱり民間の漁船でしょうけれども。頭の上でブンブン敵機が飛び回っていますからね。とても出す勇氣はないでしょうしね。

司会 どうもきょうは、みなさんありがとうございました。

このセッションが行われた数週間後に、杉本作兵衛氏から補足的な意味での手記のご送付がありましたので、合わせて以下に掲げてご参考に供します。

〔中島 洋〕

トラック空襲 (手記)

杉本作兵衛

第一日(昭和十九年二月十七日)

われわれ第四海軍軍需部(横須賀付秘密番号ウ五ウ六二)部隊の基地は夏島の東部に位置し、本部庁舎は五十メートルの高台にあって、その約百メートル上にトロモン山の第一見張りの機銃台があり、右前方に竹島の砲台、左前方には松島の砲台が望まれ、ちょうど各砲台に囲まれて、われわれの職場がある感じでした。

夏島の海岸線に沿って三基の一万トン重油タンクが、それぞれ三メートルの土手に取り巻かれて並んでおり、そこから、約二百メートルの広場を置いて、本部に向かって、被服、通常物品、船舶用需品、糧秣などの、木造二階建の物資倉庫が整然と並び、海上各艦船、陸上各部隊および民間の一部に支給する物資が満を持していました。

(昭和十八年二月に物資倉庫を視察された山本長官は、重油タンクが見晒しであり、しかもその近辺に物資倉庫があるのは、有事の際に極めて危険であり好ましくないとわれたそうである)。

火器類のほとんどは、秋島および、ネーチャップ(夏島西北部)の艦隊基地近くに貯配備され、また、酒保物品、嗜好食缶詰、煙草、日用雑貨は市街の海仁倉庫に、生鮮野菜・魚介類、味噌・醤油、冷凍品は、夏島西部のチャーレー岬の付け根辺りにある倉庫に納まり、第一次空襲には難を免れませんでした。

昭和十九年二月十七日当日、敵機は上空に達しても、攻撃目標を詮索するためか、夜が白々と明けはじめるまでは、悠々と乱舞しているようで、その時点では、怖さを感じませんでした。五時過ぎに、本部の守衛隊員の伝令が、「空襲中は、各自、身の安全をはかりつつ担当職場を見守り、万一の折は、速やかに本部へ通報せよ。各隊員とも本部の指示を待ちつつ対処せよ。集団は敵機の目標となる恐れあり」と、注意事項をメガホンで叫びながら飛び回っていました。

砲声と銃声がおりませで聞こえ、竹島方面からの凄まじい爆発音が耳をつんざくようでした。われわれ非戦闘員の軍需部隊員は、ただただ大空を見上げ、どうなることかと友軍を心配しているのみでした。

午前七時から九時ころにかけて、敵の銃爆撃、味方の対空砲火は物凄く、砲煙は空を覆い、竹島は硝煙で見えなくなつたほどです。正午ころには、敵

の上陸の兆候あり、玉砕覚悟の陸戦用意ありとの通報があつて、われわれ軍需部隊員の中には、戦わずして死とは何事ぞと非難する者もいました。そのころ、のちに誤報とわかりましたが、北水道で敵戦艦一隻轟沈との知らせがあり、われわれ一同氣勢を上げました。この初日の空襲では、敵は、まず全飛行場を叩いて基地機能を麻痺させ、次は艦船を一隻残らず沈め、第三に軍需物資の壊滅をはかり、その他の陸上施設については、偵察と機銃掃射にとどめるつもりだったのではないでしょうか。

夜に至って各職場から、船舶や飛行場についての壊滅的な被害状況が伝わり悲嘆にくれましたが、軍需部の被害はまずまずの状況で、ひと安心でした。しかし、朝から何も食べていなかったもので、暗くなると急に空腹をおぼえ、炊所の握り飯を殊の外おいしく食べ、いつ突発事故が起こるかかわからないので、各自ゲートルを巻き直し、服を着たまま宿舎でごろ寝しました。

第二日（二月十八日）

明るく朝も五時には敵機が来襲。制空権を失った基地ではありましたが、松島と竹島の砲台が健在で、盛んに敵機に対空砲火を浴びせ頼もしく感じられました。

しかし、敵は海上に残った艦船を襲い、さらに陸上施設の攻撃に移りました。七時半ころ、軍需部の通常物資倉庫に火災が発生。本部から消防隊が出動しましたが、乾燥期のため火は見る間に次の倉庫に燃え広がり、三百余名の隊員は倉庫地帯へ集合が掛けられ、全倉庫の物資を手当たり次第搬出する命令が下され、露天への運搬が始まりました。

敵はこの動きを逃さず、編隊を以て入れ替わり立ち替わり機銃掃射を浴びせてきましたから、隊員は荷物の陰に身を潜めました。この作業の援護は第一見張りの機銃隊で、倉庫地帯上空に侵入する敵機に対し、バリバリ機銃を撃ちまくりました。

このような状況下でも、悠々と荷物を担いで運搬している者も少なからずおりましたが、何分にもなかなか作業がはかどらず、ついに糧秣倉庫にも飛び火してしまい、ある者は身ぐるみ海中に飛び込み濡れ鼠で糧秣倉庫に入ろうとしましたが、中は物凄い熱さで、どうすることもできませんでした。

午前八時半ころ、一万トン重油タンクも三基とも炎上。二日前、タンカーから重油を入れ、満タンであった一基は、天蓋を吹き飛ばして赤い炎を吹き上げ、黒煙は朦々としてトロモン山頂を覆って天空に昇っており、まさにトラックの断末魔と思えました。

やがて敵機は去りましたが、タンクは燃え続けておりました。燃料主任は、タンクの上部は燃えているが、下層部からいくらかでも油を抜き取ろうと決死隊を募り、勇気ある者が志願して作業隊を編成し、刺子の防火服を着用、海水をかぶりタンク下部の給油栓からドラム缶への抜き取り作業が続けられました。

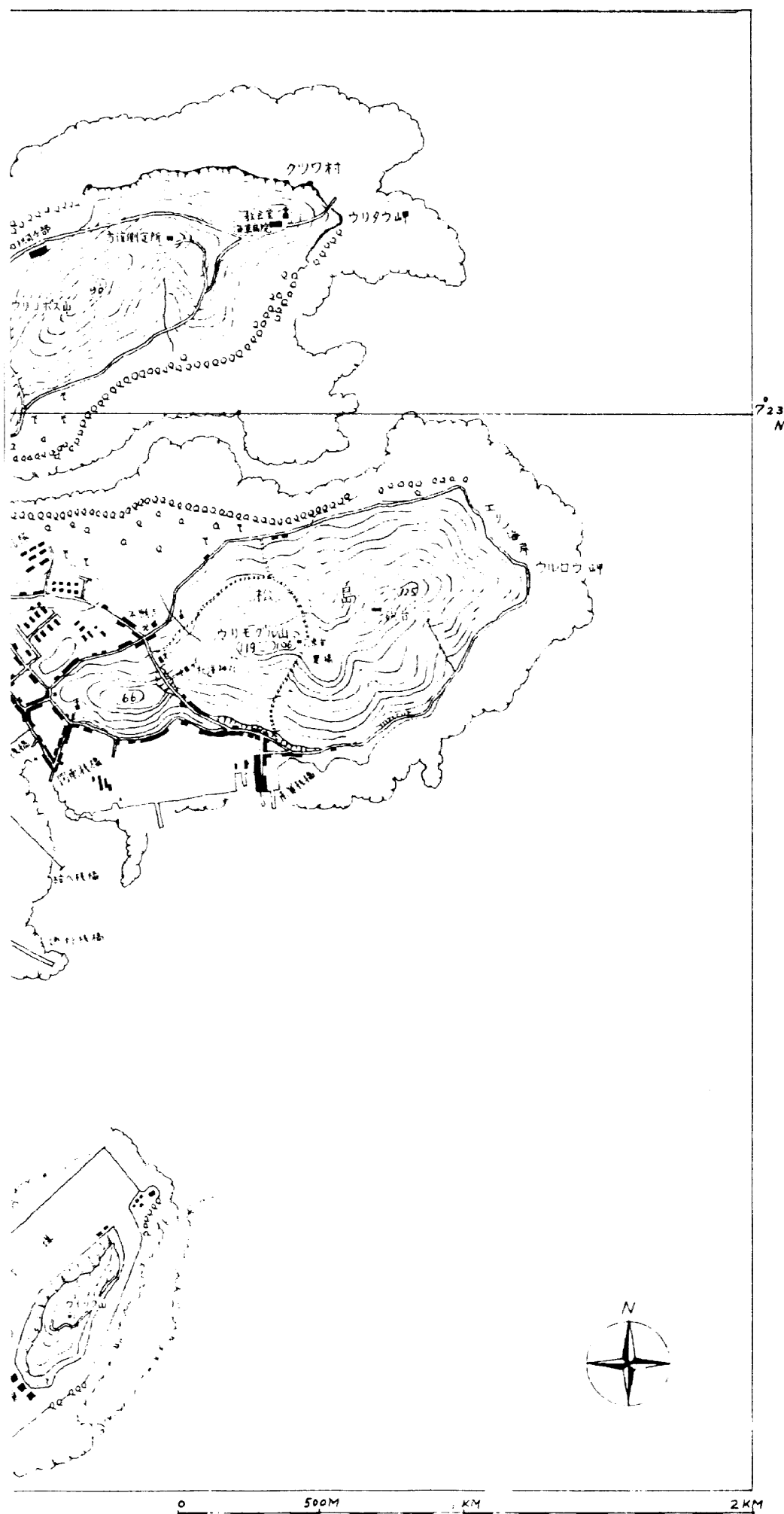
周辺は燃焼する重油の物凄い熱気と鼻をつく臭気が漂い、また、いつタンクが爆発するかわからず、その中での終始危険を孕んだ作業でしたが、ドラム缶八十本の抜き取りに成功しました。

この空襲に関し、われわれ軍需部の隊員として最も残念だったのは、一番北側にあつた糧秣倉庫で、五万人分の五年分に当たる米麦が三日間燃え続け、灰にしてしまったことです。これによってトラック全体の食料欠乏を来し、深刻な栄養失調をもたらしました。この倉庫は糧食の山積みが高く、下部から抜き取ることができず、ほんの一部が搬出されただけでした。

特にこの二日目の空襲では、われわれは激しい機銃掃射を受けたにも拘らず、多数の負傷者を出したものの、軍需部ではひとりの戦死者も出なかったことは、不幸中の幸いであつたと思えます。

その後

その後、軍需部隊員は残存倉庫の整理と、物資疎開のための山塞貯蔵庫の建設に明け暮れました。壕の掘鑿作業などは、昼夜交替制の突貫工事で成し遂げました。



製作にあたって

この地図の施設や建物は会員の方の記憶を総合して位置づけられたものである。

昭和16年頃より、昭和19年2月にかけての状態を同時点にしぼってまとめたもので、建物の重複などがあるのはやむを得ない。

会員の方の記憶が失われないうちに、なるべく正しく記録に留めておくことを目的にしたこの地図が、思い出のかけ橋ともなれば幸甚である。

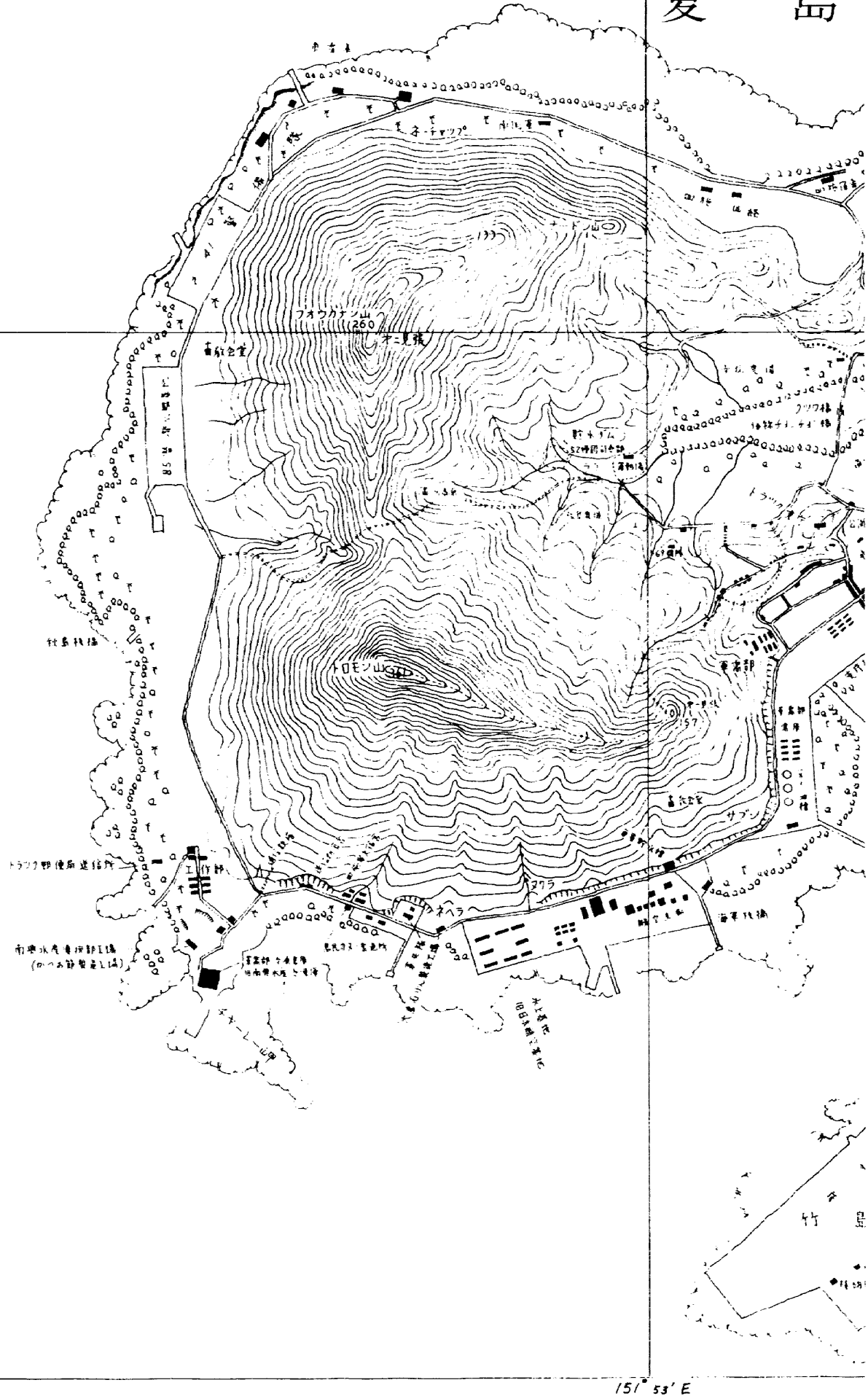
また、戦没者慰霊等で訪島される際の伴侶として、携行されれば便利であろう。

トラック島夏島会

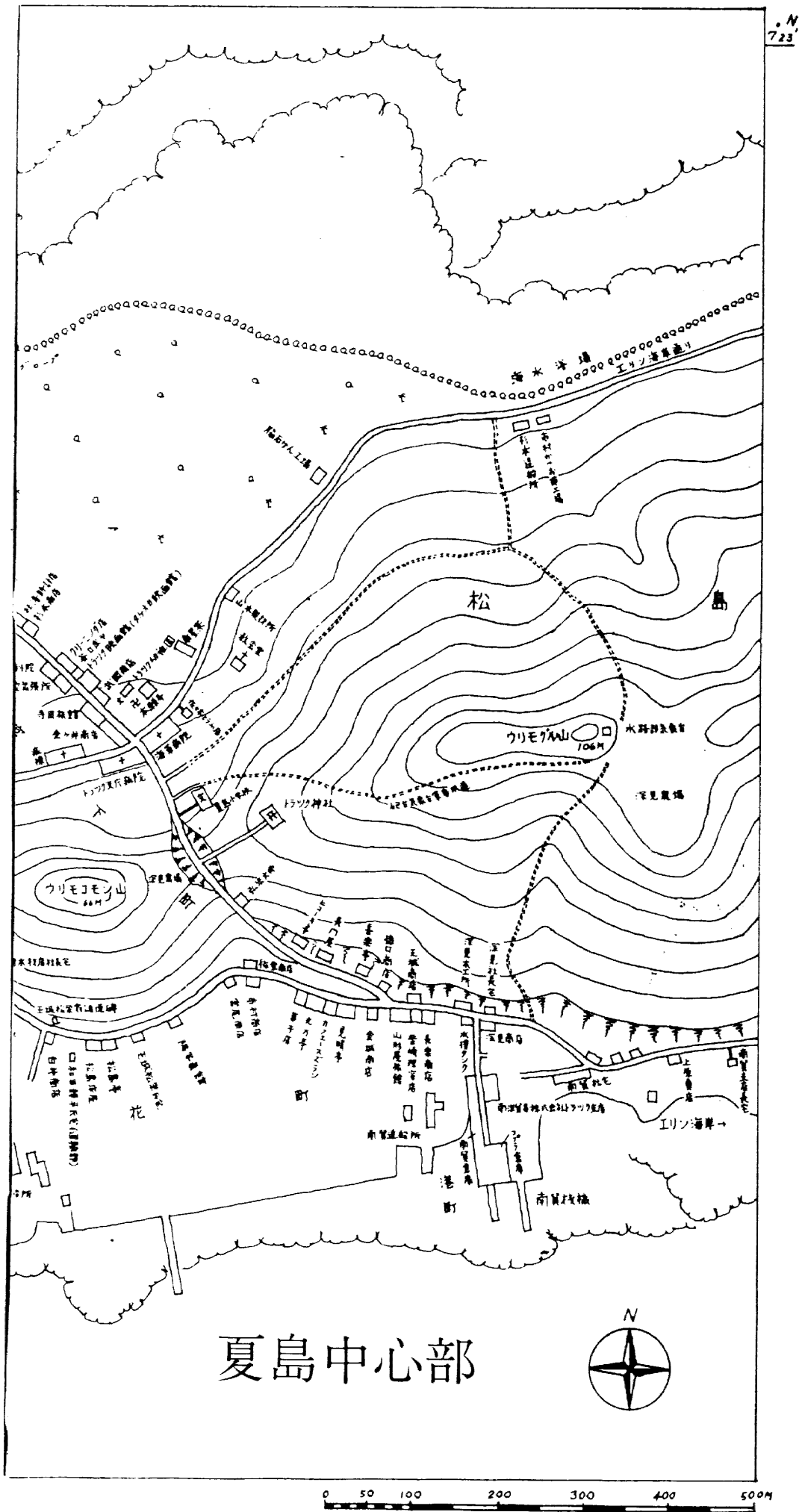
昭和53年2月26日

まとめと作図・(総務) 片山 節義

夏島



151° 53' E



723' N

製作にあたって

この地図の施設や建物は会員の方の記憶を総合して位置づけられたものである。

昭和16年頃より、昭和19年2月（空襲で町焼失）にかけての状態を同時点にしぼってまとめたので、建物の重複などがあるのはやむを得ない。トラック公園についていえば、昭和16年以降は公学校の管理から、軍の管理に移行され、公園の中に軍の施設が造られ、公園としての姿は失われたかもしれないが、町のシンボルでもある公園もとの形態も残らなかったもので、軍施設と両立させて記入したから、図形はある程度ゆがめられる結果となった。

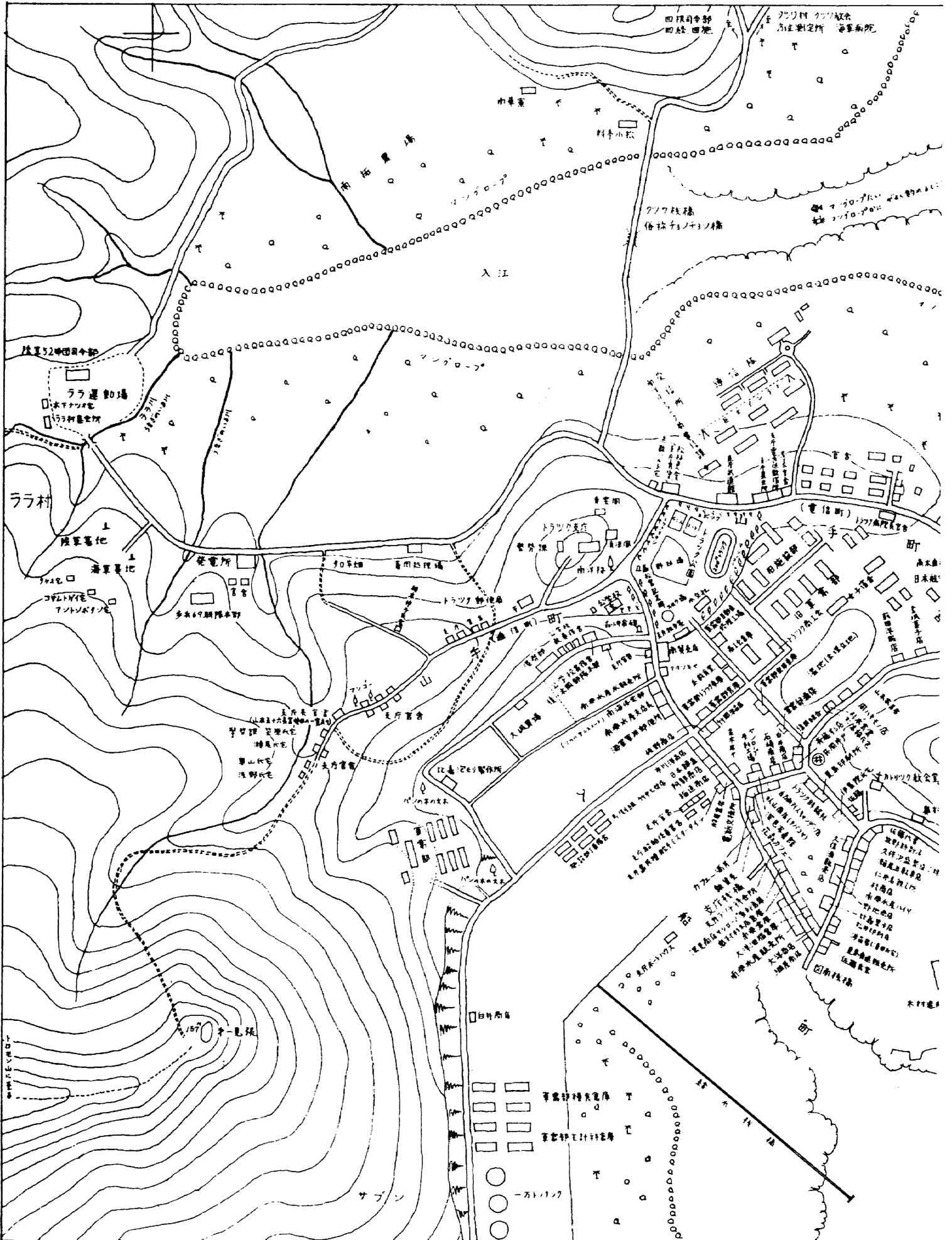
会員の方の記憶が失われないうちに、なるべく正しく記録に留めておくことを目的にしたこの地図が思い出へのかけ橋ともなり、支庁棧橋をふり出しに、順次、町並みを紙上で追って頂ければ幸甚である。

また、戦没者慰霊等で、訪島される際の伴侶として携行されれば便利であろう。

トラック島夏島会

昭和53年3月3日

まとめと作図・(総務) 片山 節義



151°53'E